はじめに

本書は、古典文学、あるいは古典文学研究方法に係る三本の講演と一二本の断想から成る。いずれも前任校（熊本県立大学）、もしくは現任校（ノートルダム清心女子大学）にて講じ、あるいは論じたものであり、また、いずれも当該校、及び他校の在学生・卒業生・教職員、そして地域の方々（高校生を含むこともある）を主対象にしたものである。

それぞれの小考にあっては、右に掲げた主対象とも関わって、その題材や分析内容等について、過度に専門的であることを避け、極力、幅広く啓蒙的であることを目標に、大学生などの初学者にとっては無論、一般の方々にとっても有用であるよう努めた。大学学部・大学院の導入期やカルチャースクール等のテキスト・サブテキストとして、あるいは古典文学に心を寄せる方々の教養書として、広くご活用いただければ幸いである。

古典文学研究の視角

目次

CONTENTS

はじめに ……i

CHAPTER Ⅰ　講演編 ……1

section #1　「左右の」大臣考
—テクストとの向き合い方— ……2

section #2　破壊者としてのかぐや姫・桐壺更衣・光源氏 ……50

section #3　在と不在
—研究の〝芽〟の見つけ方— ……72

CHAPTER Ⅱ　断想編 ……95

section #1　災害と文学と教育と ……96

section #2　○○○○は二度裏切る……100
section #3　卑怯な女三宮……103
section #4　ヒキョーな夕顔……107
section #5　「卑怯な女三宮」ふたたび……111
section #6　『光源氏物語抄』の分からなさ……115
section #7　マメタロウノ恋ノウタ……123
［附載］　マメタロウの大冒険、あるいは『古典』引用のカオス―『豆太郎物語』の世界―……127
section #8　俊成ノ「源氏見ざる歌詠み」ノ判……136
section #9　雨①……139

section #10　雨②……143
section #11　〈俯瞰〉する『岷江入楚』……145
section #12　「疎き人」？　誰と？……152

CHAPTER Ⅰ　講演編

section #1

「左右の」大臣考

―テクストとの向き合い方―

本稿は、平成二七年七月一一日に開催された「熊本県立大学日本語日本文学会」例会における講演記録である。本会参加者の多くは本学の学生や教職員であるが、他大学の学生や教職員、一般の方の聴講も一部見られる。

当日の配布資料、及び、スライド提示資料は、一括して本稿の最後に掲げた。なお、スライド資料の影印画像は、源氏物語大島本が『大島本源氏物語』（角川学芸出版（古代学協会所蔵））、大澤本源氏物語が『幻の写本・大澤本源氏物語』（宇治市源氏物語ミュージアム）、九州大学蔵本うつほ物語が『宇津保物語（細井貞雄書入本）』デジタル画像（九州大学付属図書館九大コレクション（部分））に、それぞれ拠っている。

文学部日本語日本文学科の中井です。主に平安期の物語について研究しています。ここ数年は、物語内部の政治力学や権力構造に興味を持っておりまして、本日もそのような観点から、お話をさせていただくことになると思います。配布資料は片面印刷のレジュメが

二枚4ページです。

講演に先立ちまして、本日多く用いる「テクスト」という用語について定義しておきます。もともと「テクスト」というのは、糸で編んだ織物のように、言葉が集まった状態のことです。衣服のことを「テキスタイル」と呼びますが、同じ語源です。そこで、本日は「テクスト」イコール「私たちが研究対象とする文字の集合体」とします。例えば、文学研究の立場なら、活字本の「本文」、正しくは「ほんもん」と呼ぶべきですが、聞き取りづらいと思いますので「ほんぶん」と言います。あるいは、それら活字本の元となった「底本」、「そこほん」ですね、即ち、自筆の原稿や写本の本文のことです。語学や教育学の立場なら、文字だけでなく、音声やアンケートや数値などのデータを扱うこともあると思いますが、これらも広い意味での「テクスト」としましょう。つまり、文学・語学を問わず、時代を問わず、文字言語・音声言語を問わず、皆さんが研究対象とする文字や言葉などの集まり、それが「テクスト」である…。

では、ここで皆さんに問いたいと思います。皆さんは、なぜそのテクストを使っているのでしょうか。例えば、有名な作家や作品なら、様々な出版社から活字テクストが出ています。写本でも、「孤本」でない限り、いくつも種類がありますし、データベースもアンケー

トも、もっと違う母集団のものがあるはずです。

たまたま手近にあった。先生に紹介された。或いは一番安かった。様々な理由があると思いますが、果たして、本当にそのテクストで大丈夫ですか。

本講演におきましては、「『左右の（ひだりみぎ）』大臣考―テクストとの向き合い方―」と題しまして、テクストをいかに捉えるべきか、ささやかな提案をしたいと思います。私は、平安文学の立場ですので、源氏物語の写本を中心に説明を進めますが、最後のまとめは、研究ジャンルを問わず、皆さん全体に関わるところに着地する予定です。

【行6】
本　若菜上巻
左右の大臣
左右ひと
つぼ物語　九州大学蔵本
（2行目末より）　左右

ではまず【資料1】をご覧ください。源氏物語の写本を、と言ったところですが、その前に、少し狭衣物語を見ておきたいと思います。と言いますのも、狭衣物語は、写本相互の異文の多さ、即ち表現のズレが大きく、示唆に富むからです。今回は有名な「天稚御子降下事件」を取り上げてみました。

主人公狭衣が、ある時、帝に笛を演奏させられます。すると、そのすばらしさに感激した天人「天稚御子」が降りてきて、狭衣を天上界に連れて行こうとします。ＡＢは共にその直後の場面です。現代語訳を後ろに付けてあります。いろいろな傍線が、少し目にうるさいですが、同じ種類同士が対応しています。では順に見ていきます。

まず、Ａですが、春夏秋冬四冊本と言いまして、現在筑波大学にある写本です。この本は新潮日本古典集成の底本「そこほん」となっておりますので、本文の引用はそれに拠りました。まず一重傍線部、「かうめでたき（天稚御子の）御有様のひき離れがたうて、（狭衣は）笛を吹く吹くさそわれぬべき気色なるに」。狭衣が天稚御子と共に天上界に行きそうになります。すると点線部、「帝の御心騒がせたまひて、…いといみじき御気色にてひきとどめさせたま」う、と帝が必死に引き留めます。すると狭衣は、波線部、「帝の袖をひかへて惜しみかなしみたまふ、親たちのかつ見るをだに飽かずうしろめたうおぼしたるを」、「このた

びの御供に参るまじきよしを、言ひ知らずかなしくおもしろく文つくりて」とあるとおり、まず帝が悲しむこと、次に親が心配なことを思って、結果、天稚御子の御供はできないと漢詩にします。つまり、Aの狭衣は、帝達の悲しみを慮って、自ら天上界行きを中止したわけです。

ではBはどうでしょうか。小学館新編日本古典文学全集の「そこほん」になっている深川本です。一重傍線部、狭衣が天稚御子と天上界に行きそうになること、点線部、それを帝達が引き留めること、ここまではAとほぼ同じです。しかし波線部、「この御子もいと心苦しう思しわづらひたるけしきにて」、「（天稚御子は）えひたすらに今宵率て昇らずなりぬるよし、おもしろくめでたう文に作りたま」う、となっていて、Bでは天稚御子が、帝達を心苦しく思って、狭衣を連れて行くのを止めると漢詩にしています。帝に配慮するのは、天稚御子であり、狭衣ではありません。そればかりか、BにはAにはない狭衣の様子も描かれます。二重傍線部、「中将うち泣きて、心より外に口惜しう、かかる絆どもにひかへられたてまつりて、今宵御共に参らずなりぬる」。ここはレジュメ下段の《訳》も読んでみます。二重傍線部のところをご覧ください。「狭衣中将も涙をこぼして、心外で悔しく、このような帝達との絆しなどに引き留められ申し上げて、今宵天稚御子と共に天上に参上でき

なくなった」。狭衣は帝との絆し、ご縁のせいで天上に行けなくなったと悔しがっています。つまり、Bの狭衣は、天上界行きを優先して、帝達を顧みない人物なわけです。

つまり、Aでは、帝の引き留めに自ら応じる、即ち帝の意向を重んじるのに対し、Bでは、帝の引き留めに応じないばかりか、天上界に行けない原因となった帝を批判する、即ち帝を軽んじる。まさに対照的です。実は、狭衣は、最終的に帝になるのですが、そうすると、狭衣が、そもそも帝の存在を重んじる人物か、軽んじる人物かによって、物語全体の意味もずいぶん変わってくるように思います。狭衣は元々源氏、つまり皇位継承権を剥奪された立場です。Bだと、その狭衣が、帝を批判し、軽んじつつ、本来あり得ないはずの帝位、帝のポストを得ることになるわけです。だとすると、クーデターと言いましょうか、復讐と言いましょうか、今の帝達を否定するがゆえにポストを奪い返した、みたいな、いきなりドロドロとした不穏なイメージになってしまいます。つまり、テクストのズレが、ストーリー全体を、あたかも別の物語のごとく、変えてしまうことがあるのです。

では、源氏物語に戻りましょう。【資料2】にお移りください。実は源氏は、狭衣に比べるとテクストのズレはかなりましです。もちろん、写本が多いぶん異文も多いですが、あ

れほどの長篇にもかかわらず、今の狭衣みたいに人物像やストーリーが激変することはありません。この辺り、私の文学史の授業で述べた「源氏のイデオロギー化」と関わると思いますが、とにかく遙かにテクストのズレが小さいわけです。

ところが、近年、その常識をくつがえす出来事がありました。二〇〇八年、大澤（おおさわ）本の発見です。正確には「発見」ではなく、既に池田亀鑑氏が調査もしていたのですが、なぜかその後、行方不明になっていました。それが、二〇〇五年、当時大阪大学を退官されたばかりの伊井春樹先生に調査依頼が入り、二〇〇八年の源氏ミレニアムに合わせて公表されたのです。現在は、京都宇治の源氏物語ミュージアムに所蔵されていますが、当時、この大澤本の異文を巡って、学会に、まさに激震が走りました。花宴巻といいまして、光源氏と朧月夜の恋を語る巻があります。左大臣方に所属する光源氏が、敵方、右大臣の娘、朧月夜と通じてしまう。その後も通っているうちに遂に右大臣に見つかり、須磨に流れることになります。いわば、この恋は光源氏の運命を左右する重要な恋なわけです。さて、【資料2】ですが、光源氏が、まだ名前も知らない朧月夜にもう一度逢いたいと思って右大臣邸に侵入し、漸くそれらしい女君を見つけます。そして、和歌を詠み掛けた、その直後か

ら巻末にかけての叙述です。Cは大島本の翻刻です。大島本というのは、藤原定家が校訂した、いわゆる青表紙本の系統とされていまして、特に重要視されてきました。モニターに写本を映してみます。（スライド資料の【資料2】C）

これでは読みにくいので、レジュメの［参考］の欄に、活字本、岩波新大系のテクストを載せてあります。「（光源氏が朧月夜と思しき女君に歌を詠み掛けると、女君は）え忍ばぬなるべし、心いる方ならませば弓張りの月なき空にまよはましやは　と言ふ声、たゞ（朧月夜の）それなり。いとうれしきものから」。モニターのほうでも「いとうれしきものから」で終わっていることを確認してください。では、レジュメの《訳》を見ておきましょう。「光源氏からの歌に朧月夜も我慢できなかったのだろう、あなたが心に懸けてくれるなら弓張りのほぼ月のない空でも迷わないでしょうに　と詠む声は、まさに朧月夜その人のものである。光源氏はたいそう嬉しいけれど…」。

一文が完結せずに、途中で何か言葉を飲み込んだような終わり方になっています。このような変な終わり方について、例えば、玉上琢彌氏は『源氏物語評釈』で次のように解説しています。「嬉しさに飛び立つ思いながら、人目もあり、勝手知らぬ右大臣家、はばから

ねばならぬその思い、まさに無量、万感の余情を長く引いて結んだ幕切れ」。もう大絶賛ですけれども。つまり、「朧月夜を見つけたのは嬉しいけれど、今後どのように関係を続けようか、光源氏があれこれ思案する様子が現れている」という理解ですね。確かに、お目当ての朧月夜を見つけて嬉しい、けれどここは慣れない敵方の屋敷だし、これからどうしようかな…という心理は、この後の、それでも朧月夜に通って、想定外に右大臣に見つかってしまうという展開からすると、ごく自然です。つまり、この大島本のテクストは、光源氏がこの後も朧月夜に通おうとするがゆえの、言いかえるならば、朧月夜に熱するがゆえの表現だと理解されてきたわけです。

ところが大澤本はこの部分、少し違います。【資料2】Dにお移りください。和歌の後ろから読みます。「…といふこゑ、たゞそれなり。いとうれしき物から、かろ〳〵しとてやみにけるとや」。写本も映しますのでモニターもご確認ください。（スライド資料の【資料2】D）

最後の所、校訂者が、他の本と見比べて、ミセケチにして消した跡がありますが、もともと書写段階では「かろ〳〵しとてやみにけるとや」とあったことが分かります。

これは大澤本にしかない独自の異文です。レジュメのほうで《訳》を確認しておきましょう。「…光源氏はたいそう嬉しいけれど、一方で返歌の声を男に聞かせて軽々しいと思って

その後交際を絶ってしまったとか」。

つまり、光源氏は、返歌をした朧月夜に、嬉しいとは思うものの、男に声を聞かせるような軽々しい女だと見限り、これ以降通わなくなった、というのです。自分が返事を求めたくせに「どっちやねん」という感じですけれど…。まあ、しかし、Cの大島本との違いは明らかです。片や、朧月夜に熱する人物、片や、冷める人物。先ほどの狭衣のごとく、光源氏の人物像も対照的です。そうなると、大澤本だと、一旦見限ったはずの光源氏が、なぜかその後も朧月夜に通ったことになりますから、私たちは、その理由について、検証しなければならなくなります。

このように、テクストのズレによって人物像が激変すると、ストーリーも、そして私たちの読み方も大きく変わってくるわけです。ではそのような状況の中で、私たちはどのように源氏物語のテクストと向き合えば良いのか、ということになります。

これまでは、先ほど触れました藤原定家が校訂した、いわゆる青表紙本系統の本を重視してきました。大島本もこの系統ですが、いわば、定家という権威を優先して、それ以外の写本にはあまり注目してこなかったわけです。しかし、近年、そのような流れが変わり

つつあります。前に名前を挙げました伊井春樹先生や、その後任の加藤洋介先生など、大阪大学のグループにより、青表紙本、中でも大島本は、決して絶対視するようなテクストではない。あくまで様々な写本の一つにすぎない。というように、相対化、つまり絶対化の反対ですね、相対化する動きが出て来まして、多くの研究者の追認もあって、学会の主流になっています。なぜ大島本が絶対化できないかについては、二年生以上は「文献学基礎論Ⅱ」で、一年生は「文学研究法基礎」の授業で詳しく説明しますが、まあ、その伝来も、書写者も、書き入れ注記も、かなり「いいかげん」なのです。何人もが書き足した痕跡もありますし、この本だけを特別視するには問題が多い、ということですね。そこで、とにかく、大島本に偏ることは止めて、全ての写本について、その異文をそのまま受け容れよう、という流れに変わりつつあるわけです。例えば、【資料1】で述べた、ダークな狭衣は、深川本狭衣物語の論理として理解しよう。【資料2】で述べた、冷めた光源氏は、大澤本源氏物語の論理として位置付けよう、ということです。異文だからといって無視するのではなく、そのままでどのような物語として読めるのか、いわば、それぞれ、違った個性の物語として積極的に評価しよう、というわけです。

では、このような考え方に基づきまして、今からある写本テクストについて、その個性を探ってみたいと思います。少し難しい内容も含んでいますが、出来る限り分かりやすく説明しようと思います。

今から取り上げるのは、実は大島本です。先ほど大島本に偏ってはダメだと言ったばかりじゃないか、なのに、三条西家本でも池田本でも中山本でも保坂本でも陽明文庫本でもなく、なぜ大島本なのか、と言われそうですけれども…。大きな理由は二つあります。が、いずれも後ほど明らかにします。

ではレジュメ二枚目上段の3ページ、【資料3】Eと、その横、Fの下の図を併せて御覧ください。光源氏亡き後の世界、宇治十帖なのですが、光源氏の息子として育った薫が、今上帝と明石中宮の長女、女一宮を、明石中宮主催の法事の後、垣間見、覗き見ですね、をする場面です。明石中宮は光源氏の娘ですので、光源氏の建てた豪邸、六条院が実家です。薫は、普段は別の所に住んでいるのですが、何と言っても明石中宮は姉に当たりますので、簡単に六条院の奥まで入れるわけです。それを良いことに、薫が女一宮を覗いていると、六条院の女房「おもと」がそれに気付いて、薫に近づいてくる。薫は正体がバレないように隠れる。取り逃がした「おもと」は、一体誰がこんな奥深いところまで、つまり、

中宮の娘がいるような守られた空間ですよね、誰がそんなところまでやってきたのか、と思いを巡らせる、という内容です。Eを、後ろから三行目の「このおもとは」から読んでおきましょう。「…このおもとは、いみじきわざかな、御き丁をさへあらはに引きなしてけるよ、右の大殿の君たちならん、疎き人、はたこゝまで来べきにもあらず…」。《訳》も後ろから四行目、「このおもとは」以降を見ますが、「大殿」というのは大臣のことです。また「右大臣」とありますが、ここはイコール左大臣夕霧と捉えます。理由はすぐ説明します。「このおもとは、大変なことだなあ、障子だけでなく御几帳まで奥が露わに見えるように置いてあったことよ、覗いていたのは右大臣（＝左大臣夕霧）の子息達であろうか、明石中宮と関係が疎遠な人では、とてもここ（＝六条院の女君や女房たちの控室）まで進入することは出来ないだろうし…」。つまり、この時「おもと」がイメージした侵入者は「夕霧の子息達」ということになります。夕霧は、明石中宮の兄で、しかも、この時六条院の管理者でもあります。その子ども達が奥までやってきても特段不自然ではない。そのように「おもと」が判断したということなのですが、実はこの部分、問題が二つあります。

まず一つ目。実は、ここを「夕霧の子息達」と読むためには、本来、「左の大殿の君たち」

とあるべきなのですが、［参考］の欄のとおり、夕霧の官職は、大島本を含め、多くの写本でごちゃごちゃに乱れています。ここより前の竹河巻で夕霧は左大臣になるのですが、なぜか後の巻で右大臣に戻っていたりします。これは、私もよく分からないのですが、もともと紫式部が源氏物語の全てを書いたわけではない、という、既に鎌倉期には広まっていたらしい伝承と関わっていると思われます。つまり、竹河巻の作者が紫式部とは別人だと考える書写者や校訂者は、当然、夕霧の昇進記事を信じませんから、右大臣と書き続けるわけです。で、何度も書写が繰り返されていくうちに、書写者や校訂者の考え方によって「右」になったり「左」になったりして、結果「ごちゃごちゃ」になっていく、と。

しかし、今は、竹河巻も同一作者と考えるのが一般的です。だとすると、『公卿補任』という任官記録を見る限り、平安時代に左大臣が右大臣に降格する例はありませんから、本来、竹河巻以降の夕霧は、左大臣で統一されるべきだということになります。現に、当の大島本も、おそらく迷いつつ、やっぱり「右」であるはずがないと考えたのでしょうね、［参考］の最後の行の点線部ですが、Eの直後、同じ蜻蛉巻三〇三ページで「左」に戻っています。しかも、ここは写本ではひらがなで「ひたり」となっています。三一〇ページも、これが夕霧の官職の最後の記事なのですが、これも「左」です。いずれも、写本に修正した痕跡

はありません。ですので、大島本は、本来夕霧は左大臣のはずだと捉えているテクストだと見て良いと思います。ということで、「異文のままで」と言ったばかりですが、ここについては、「左大臣夕霧」だと理解することにします。

さて、二つ目の問題です。実は、これが本当の問題なのですが、この部分、大島本の写本では、どうももっと複雑なようなのです。【資料3】Fを御覧ください。この部分、もともと「左右の大殿の君たち」とあったのを、「左右」をミセケチで消して、「右」と書き入れてあるのです。モニターにも映しておきます。（スライド資料の【資料3】F）

ということは、大島本の校訂者が、他の写本と見比べて「あれっ」と思ったのでしょうね、ここを「右」と直したのだと思いますが、それにせよ、もともとの大島本は、ここを「左右の大殿の君たち」としていたことになります。実はこのことは、なぜかあまり注目されていません。おそらく、書写者の書きミスだ、あるいは右か左か迷った挙げ句、両方書いてしまって、誰かが後から「右」と校訂したのだ、とあっさり理解されたのだと思います。しかし、よく考えてください。左を右と書きミスする、右を左と書きミスする、それは分かります。しかし、左を、あるいは右を、「左右」と書きミスするでしょうか。あるいは、どちらか迷ったという場合でも、普通、ええいとどちらか一方に決めるわけです。百歩譲っ

て、書写者が、迷ったから取り敢えず両方書いてみた、ということだったとしても、最後、「右」なり「左」なり、どちらかを消しませんか。そのまま残さないですよね。現に、ここ以外はどちらかしか書いていないわけですから。しかも、モニター画面では分かりにくいのですが、実は下の「右」の字だけに、一度、朱で消された痕跡があるのです。朱で消されているということは、「左右」と書いた書写者とは別の校訂者Xが、後から一旦「左」と校訂したということです。更にその上に、また別の校訂者Yが、今のように墨でミセケチにして「右」にしたということですね。物語が、校訂者の理解によって書き換えられていくものであることが窺えますが、ともかく、書写者は、確かに「左右の大殿」と書き残していた。大島本は、もともとはここを「左右両大臣」と把握していた、ということです。ちなみに、現存の写本では、大島本のみです。大島本の個性的本文、ということですね。

では私たちはここから何を読み取るべきなのでしょうか。この場面前後の政治状況について、少し整理してから考えてみましょう。【資料4】にお移りください。

①は先ほど少し触れた、夕霧が左大臣になる竹河巻の叙述です。読んでおきます。「左大臣（ひだりのおとど）亡せ給て、右は左に、藤大納言、左大将かけ給へる右大臣（みぎのおとど）になり給」。当時の左大

臣が亡くなって、空いた左大臣ポストに右大臣だった夕霧が上がり、夕霧がいた右大臣ポストに「藤大納言」が昇進した、と。「藤大納言」というのは、柏木の弟で、紅梅と呼ばれる人です。つまり、空きポストを玉突き状に埋める形で、左大臣夕霧、右大臣紅梅、という政治体制が成立したわけです。先ほど触れたとおり、この記事を信用しない立場もあったわけですが、私たちは信用する前提で進めていきます。

この時、夕霧は四十九歳なのですが、注意したいのは、遡ること三十一年、夕霧十八歳の時の官職です。②を御覧ください。夕霧の官職は、波線部、「中納言」とあります。この時、紅梅は、太傍線部、「弁の少将」となっています。「弁の少将」というのは、本官を近衛少将としつつ、同時に弁官を兼務しているということです。弁官というのは、各省庁の庶務や監視を行う重要職で、出世コースです。

さて、ここで問題にしたいのは、夕霧と紅梅の、夕霧が十八歳と四十九歳の時の本官の位階、ランクの差なのです。［参考］の欄を御覧ください。表の中に①②というマークが入っていますが、今見た本文の①②と対応しておりまして、①が夕霧四十九歳の位階、で、②が十八歳の位階、というふうに見てください。つまり、ふたりとも②から①まで、三十一年間かけて昇進したということなのですが…。

いかがでしょう。一目瞭然だと思います。位階の欄に網掛けをしてありますが、夕霧は「従三位」、「じゅさんみ」と読みますけれど、そこから「二位」まで2ランクアップです。それに対して、紅梅は「正五位下」、「しょうごいげ」から「二位」まで、なんと8ランクアップです。もちろん、上位ほど定員が少ないことが多いので、一つの官職に長い間留まる傾向にあります。しかし、それを差し引いても、明らかに夕霧は紅梅より昇進が遅い。というより、紅梅が、着実に夕霧との差を詰めてきた、ということだと思います。

更に注意すべき点があります。レジュメ下段4ページの③［系図ア］を御覧ください。宇治十帖の当初の系図です。夕霧を起点に見てみます。まず、夕霧は、長女大君を今上帝と明石中宮の東宮、つまり次期天皇ですね、この人と結婚させています。そして、次女中君を二宮と、この人は次期東宮候補なのですが、この人と結婚させています。更に同じく六の君を匂宮、この人も後から東宮候補になりますが、この人と結婚させます。本当は、この六の君の結婚は、物語上は、もう少し後のことなのですが、夕霧の権力体制が分かりやすいので、ここで一緒に挙げておきました。

今「夕霧の権力体制」と言いましたが、もう明らかですよね。帝と婚姻関係を利用して